ぶらりわが街宮沢界隈

(24)養蚕(ようさん)・蚕種(さんしゅ)・製糸(せいし)　―　Ⅲ　―　蚕業講習所の設立

市域における蚕種を含めた養蚕業の技術が高かったのは、技術の改良と発展に努めた人々の存在が大きく反映しています。明治23年(1890)大神村の石川国太郎たちが、西多摩村の下田伊左衛門を中心に「成進社」を創立。養蚕業に関する講習・試験・調査・巡回講話・蚕種配布事業を自的としていた。その蚕飼育法は、ある程度の温度を保って飼育し火力と寒暖計を使い、従来に比べて飼育日数は短縮された。そして、明治41年(1908)石川(大神村・石川国太郎)、紅林(くればやし)(郷地村・紅林七五郎)、下田(西多摩村・下田伊左衛門)、高崎(福生村・高崎治平)の4カ所の蚕業講習所に分所されました。講習所では、優良蚕種の製造・販売・蚕業技術指導者の養成や一般の養蚕農家に対する技術指導を行い、受講者は一万人にもなりました。また後、立川村に成進社理水館蚕業講習所も開設。このように、指導者の育成や技術の指導が基礎となって、市域の養蚕業が発展しました。

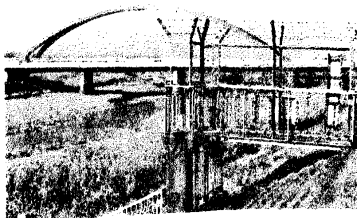
○　石川蚕業講習所―石川国太郎は、大正元年(1912)東京蚕種同業組合が創立されると副理事長になり、後には組合長として、その発展に尽くしました。

○　紅林蚕業講習所―紅林徳五郎(寛永元年(1848)出生～明治40年(1907)4月死去、享年60歳)は、明治38年(1905)10月、東京府から多摩川沿い(現・郷地町3丁目雇用促進住宅附近)払い下げを受け、新堤防を築き土地開拓。翌年39年農業多角経営を目指し「紅林農業経済規範場」開設、その一環として養蚕部を開設。明治40年4月徳五郎死去により、長男の七五郎(明治8年(1870)出生～昭和10年(1935)死去享年65歳―明治44年(1911)～大正8年(1919)まで東京府諌会議長を歴任、この間中神村外七ヵ村村長も務め、大正8年の五日市鉄道発起人総代、後取締役就任)が引き継ぐ。明治41年養蚕部を「成進社紅林蚕業講習所」と改称。大正4年(1915)下田伊左衛門の死を境に、成進社の本社というべき下田講習所やほかの講習所が次第に衰退(すいたい)していくなかで、成進社の中心的存在となって技術の普及に努め、外国(中国、朝鮮など)からも研修や視察に来るほどの優秀な技術を持っていました。大正6年(1917)福島村字東原613(現・東町5丁目、昭和公園の一部やその南一帯)に移転。構内敷地850坪、隣接桑園(そうえん)約3反歩を買収し、施設の整備を行った。養蚕・製糸業の衰退により、昭和31年(1956)解散。歴代の所長は初代＝紅林徳五良、二代＝紅林七五郎、三代＝鈴木俊雄、四代＝松本金次郎である。

・　頒徳碑(しょうとくひ)―市立昭和公園内(東町5－13)陸上競技場の南側傍(かたわ)らの比較的大きな碑で、風化のせいか容易(ようい)に判読出来ない。青梅・五日市鉄道や養蚕業などに明治、大正期を通じて活躍した、郷地村紅林徳五郎、七五郎親子を称した長文の碑。昭和17年(1942)に少し東寄りあった紅林養蚕講習所内に建立され、翌18年1月、現在地に移設。

記　　防犯宮沢支部会計　西山　禎一

紅林蚕業講習所　昭島市民秘蔵写真集より



紅林水門(福島町3－25先　多摩川沿道脇)－昭和用水多摩川放水路

明治39年(1906)紅林徳五郎が開削(かいさく)したもの、水門設置の自的は、「紅林農業経済規範場」の治水(ちすい)と農業用灌漑(かんがい)にあった。現在の多摩川の川床がいかに下がったかがわかります。ここから見る多摩川の風景は、「多摩川八景」(国土交通省)の 1 つになつており「ナメ」あるいは「土たん」と呼ばれる地層(上総層群)がむきだしになつています。